

すいた環境サポーター養成講座 第10回目

日時：1/13(月・祝)10:30~16:00

場所：千里市民センター2階 大ホール

◆ワークショップ運営実務

担当：(特活) インクルージョンプログラムラボラトリ 事務局長 岩屋 さおり 氏

初めに、団体のミッションやグループの想いを、イベントやワークショップを通してどのように具現化したらよいのかについて、マネジメントとプログラムの両面から説明がありました。これについて、アウトカムとアウトプットを定め、財源確保や場所、物品の手配、人材確保、安全管理などを学びました。

またイベント等の終了後に行うフィードバック(ふりかえり)の必要性が説明され、個人でのふりかえりをグループで、グループでのふりかえりを全体で分かち合うことによって、気づきを豊かなものにしていくことを学びました。



次に、午後から開催する公開講座の設営を通して、ワークショップの運営実務について学びました。午後からの、一般の方々が来場される公開講座は、受講者が今までの学習内容を実践する場となります。

ワークショップの会場設営、役割決め、各ワークショップの指導担当のスタッフとイベント内容の確認と実施準備をし、指導スキルについてもこの時間に学びました。



◆(公開)ワークショップの実践 2

公開講座直前まで、受講者全員とスタッフとで、ワークショップの準備や指導方法の確認などをおこないました。

広報担当になった受講者は、会場近辺でチラシを配布し、ワークショップの周知に努めました。天候に恵まれたこともあり、出足は好調で、開始時間より早く来場される方もいらっしゃいました。



開始時間になると、広報担当の受講者が配布したチラシを受け取った人、お子さん連れの人、また事前に配ったチラシを見て来られた人などが、会場に集まって来ました。

伝承草花遊びのコーナーでは、「ケメリ（葉で作る草の器）」と「草笛」を作りました。草笛は、「昔を思い出します」と大人に大人気でした。ケメリ作りではなかなか上手に作れず、何度も挑戦する人に、受講者が分かりやすく指導していました。



はがれないばんそうこのはり方のコーナーでは、受講者が興味をもってもらうための説明を考え、実践していました。参加者と受講者で、応急手当の方法や大切さについても話をすすめ、災害時、被災時にどうしたらよいか、どんなことができるかについても意見を交わしました。



環境小咄^{こぼなし}は、万博記念公園のネイチャーガイドとして活躍するアマチュア落語家の2人が担当しました。どんぐりガイドをして得た知識を「葉っぱちゃんとどんぐりくん」という紙芝居にし、小咄に取り入れていました。普段何気なく見ている葉やどんぐりも自然循環していることを再認識する内容で、お子さん連れの家族も多く、世代を超えて、とても楽しんでいる様子でした。



指ヨガ・ストレッチのコーナーでは、簡単にできる指ヨガやストレッチ法等を紹介しました。環境サポーターやボランティアとして活動するための身体づくりをねらいとしています。身体の筋肉を柔らかくし、足指を継続的に動かすことで、転倒事故などを防止することもできます。運動習慣のない人にも無理なく参加できると、参加者に好評を得たプログラムでした。



水の生きもののぬり絵コーナーでは、ゲンゴロウ（絶滅危惧種）やアメリカザリガニ（緊急対策外来種）やカワセミ（水辺に生息する鳥）等のぬり絵を用意しました。今回はお子さんの参加が多く、ぬり絵をしながら、水辺の生態系や外来生物について話がはずみました。



またこのコーナーは、保護者が講演(生物多様性 その恵みを考えよう ～たこ焼きから考える生物多様性～)を聴いている間も、子どもがぬり絵をして待ってられるように、その終了時まで実施していました。

◆生物多様性 その恵みを考えよう ～たこ焼きから考える生物多様性～（公開講座）

講師：大阪府立大学名誉教授・学長顧問 石井 実 氏



小学生から年配の方まで、幅広い世代の参加がありました。この講演では、生物多様性と私たちの暮らしとの関わりについてのお話がありました。

地球上には森林、動物そして自然、都市などの様々な生態系があり、その中の森林の土壌には海洋に次ぐ多様な生物群が生息します。森林生態系は沿岸海域や干潟の生態系と相互に関係しあっています。

生物多様性とは①種間の多様性、②種内の多様性、③生態系の多様性を含むものをいいます。①種間の多様性とは、多様な生物種があるということ、②種内の多様性とは、同じ種でも、いろいろな個性があり、遺伝的に多様であるということ、③生態系の多様性とは、地球上にはいろいろなタイプの自然環境があるということを行います。

私たちの食は生物多様性と無関係ではありません。たこ焼きを食べられるのは、約 40 億年の進化の結果生まれた地球の生物多様性や豊かな生態系の恵み、先人の品種改良の努力の結果そのものです。

また、生物多様性の価値は、生態系サービス（生態系の公益的機能）として説明することができます。基盤サービス（物質循環、酸素供給等、生態系の基盤となる機能）、供給サービス（前述の衣食住医）、文化的サービス、調整サービス（気候の調整、洪水の抑制等）に分けられます。

現在、生物多様性は急速に劣化しています。世界ではキリンが絶滅危惧種になっており、日本では外来種の侵入にともない、里地・里山に生息する生物が減少しています。しかもこれまで気にも留めていなかった

た身近な野鳥であるヒヨドリや稲の害虫として知られるイチモンジセセリなどの個体数の減少が確認されているそうです。また、最近新たな生物多様性の危機要因として、プラスチックごみの海洋汚染も問題視されています。

特定外来生物についても学びました。一見すると植栽したかのように思えるオオキンケイギクや、淀川のブルーギルや、水辺のミシシippアカミガメや、ウメやサクラの木に被害を及ぼすクビアカツヤカミキリなどが例にあげられ、私たちの身近にいる外来種が生物多様性を脅かしている実情が説明されました。

日本における生物多様性の4つの危機は①開発などの人間活動（開発や乱獲等）による危機、②自然に対する働きかけの縮小（里地里山問題等）による危機、③人間により持ち込まれたもの（外来生物や化学物質の影響等）による危機、④地球環境の変化（地球温暖化等）です。

私たち一人ひとりが自然の変化に気づき、考え、生物多様性を保全することが、この世代のみならず将来の世代にとっても重要です。そのために、私たちは何ができるのか考えさせられる講演でした。

◆ふりかえり

第10回目も、個人でのふりかえり、グループでのふりかえりをして、終了しました。終了後に、グループによっては、学習発表会の打ち合わせや準備をしました。